

「逃がさない。」

小野 優姫

ある夏のことです。その日のぼくは、少し熱中症  
気味でした。夏休み中で、田舎のおばあちゃん家へ  
来ていたんですね。青い田と田の間の道を、フラフ  
ラと危なっかしく歩いていました。その時。

ドンッ

誰かに背中を押されたんです。

「よっソウタ。」

それはいとこのリクでした。ほどよく日焼けして  
真つ白な歯を見せて笑うリクに悪気は無かつたんで  
しょう。でも、汗をダラダラと流していたその時の  
ぼくが倒れるには十分な力でした。

—倒れる、と思った時でした。痛みを感じるどこ  
ろか、体がフワフワした感覚さえおぼえました。そ  
して、不思議に思いリクのほうを向こうとしまし  
た。でも、そこにはありえない光景が。

—もう一人のぼくがいたのです。しかも、そのぼ  
くは白目をむいて前に倒れていました。そして、リ  
クを見ると—顔面蒼白。ひどく真つ青になっておび  
え、腰をぬかしています。でも、倒れているほうの

ぼくを見ていてこちらにはまるで気がついていませ  
ん。

その様子から、ぼくは状況を把握しました。つま  
りは、熱中症で倒れ死んでしまったぼくは、心残り  
があつて幽霊になった、と。ということは、これか  
らはなんでもできるのです。そう思うと、うれしさ  
がこみあげてきました。

ぼくの心残り—それは、ぼくをさんざんからか  
い、いじめた非情なやつ。そう、リクです。今な  
ら、リクに今までの、いやそれ以上のしかえしがで  
きる—しばらく考え、ふと思いつきました。一生、  
悪霊になつて呪つてやろう、と。

ぼくは、ガクガクと震えながら必死に逃げるリク  
に追いつき、耳元にそつとささやきました。

「逃がさない。」